



アイヤム・アハリー
Ayyam Ahli / Days of "Ahli"
2023年11月16日 No. 40

クリスマス号
目標金額
2000万円

アハリー・アラブ病院を支援する会 共同代表 村山盛忠・藤田 進
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18 キリスト教事業所連帯合同労働組合気付 MAIL : ayyam_ahli@yahoo.co.jp

アハリー・アラブ病院を支援する会ニュース・レター

クリスマス献金のお願い アハリー病院再建・再興支援のために

村山盛忠 (アハリー・アラブ病院を支援する会共同代表)

この通信が皆様方の手元に届くころ、ガザの状況がどうなっているかと思うとき、この筆は滞ります。ガザで活動中のジャーナリストが、ガザの状況を「地上の地獄だ」と訴えています。

10月17日夜、わたしたちが支援しているガザのアハリー病院がイスラエル軍により爆破され、避難していた住民500人に及ぶ人々の命が奪われました。その後、隣接地にあるジャバリヤ難民キャンプも空爆により、50人の死者、2万2千人が負傷しています。いまま瓦礫の下に埋まっているとみられる1200人の子どもたちを含めると、何千人もの人々が行方不明の状況です。保険医療システムは崩壊され、病院、学校など人道援助の施設はミサイルで崩壊、安全な場所は皆無です。

アハリー病院爆破による殺戮の事実は、いまパレスチナではイスラエルによるジェノサイド（集団殺害）が起きている現実です。

アハリー・アラブ病院は、1893年英国教会宣教会（CMS）により設立されたパレスチナにおける最古の病院です。1980年初頭以降は、現地の聖公会エルサレム教区が同病院の運営に当たってきました。同時期1982年レバノン戦争が勃発し、サブラ、シャティーラ・パレスチナ難民キャンプ大虐殺が起きたことは銘記さるべき事件です。虐殺された難民が、さらに虐殺されて難民として避



■アハリー・アラブ病院（1991年村山撮影）

難せざるを得ない繰り返しが、未だパレスチナ人に降りかかっている非道な歴史の現実です。

ガザ住民の多数は、1948年イスラエル建国、1967年第三次中東戦争により、土地を奪われ家屋を破壊され、追放難民としてガザに避難してきた人々です。病院名アハリー（native）の語意は、「故郷の、その地に住む者の」意味ですが、ガザに居住する人々の大半が難民で、現在3世代、4世代を迎える人々です。アハリー病院の使命は難民として余儀なく暮らさざるを得ない人々ために存在する病院として立っています。その病院が10月17日、爆破されたのです。時が来れば先代たちが追放された故郷の地に帰還するとの強い意をこめたアハリーの名辞でもあるでしょう。

当病院の近隣地区にジャバリア難民キャンプがあります。11月1日朝刊1頁に同難民キャンプが空爆され巨大なクレーター跡の周辺に粉々に倒壊した建物の写真が目に入り、ことばを失いました。一瞬頭をよぎった風景が浮上しました。1991年4月湾岸戦争直後に当病院とジャバリア難民キャンプを訪れた時のことです。当時パレスチナ西岸地区もガザ地区もイスラエル支配下にありました。ガザを訪ねた当日は外出禁止令が出されていました。道行く人の姿はひとりもありません。われわれを案内してくださった「UNRWA」（国連パレスチナ難民救済事業機関）の職員が自動車でジャバリア難民キャンプ地を案内してくれました。泥水が溜まる道路を自動車は走りながら、目に入ってきたのは壊れそうな建物が所狭しと密集している風景です。まるで映画のセットを見ているような錯覚を起こします。あまりの酷さにわれわれは沈黙したまま窓から外を眺めていました。国連職員が「どの建物にもバケツや空き缶がぶら下がっているのに注目してください」と。注意して見ると、どの建物にもぶら下がっているバケツや空き缶には穴があいています。この職員の説明によると、時間をかけて雨水や水道蛇口からチョロチョロ出る飲み水用に溜めたのを、イスラエル兵がバケツや空き缶を目がけて銃弾を放った穴跡とのこと。

占領下パレスチナ人の日々を悩まし脅かしてきた行為は、占領支配75年間悪化の一途をたどり、いまや空爆や戦車により人間が営む大地をクレーター化し（大穴化し）、パレスチナ人追放を策動しています。

最初にインティファダー（民衆蜂起）が起きたのは、1987年このジャバリア難民キャンプです。のちに「石の革命」ともよばれますが、インティファダーの語源は、聖書にも出てくる「ホコリを払い落とす」という意味です（「あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証として足の裏の埃を払い落とさない」マルコ6:11）。抗議と抵抗の姿勢を表わしています。この抗議と抵抗を無視するなら、「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす」（ルカ19:40）と。石、叫ぶべし！ これは、パレスチナの大地が生み出す伝統文化の反映といえます。

10月7日以降イスラエル軍は、占領下西岸地区と東エルサレムにも夜間襲撃を頻繁に行き、1800人以上のパレスチナ人が逮捕されています。拘留された人々は監獄で酷い扱いを受け、劣悪な環境に置かれています（「サビールの祈り」11月8日号）。抗議と抵抗の姿勢が疑われたり、その意志表示する者は、「テロリスト」と断定されるのです。

2年前の2021年10月19日、当時のイスラエルのガantz国防相は、占領下パレスチナ人の生活・仕事・その他の基本的人権・人道を擁護するNGOの6団体*を「テロ組織」に指定しました。

スハイラ・タラツイッさん（アハリー病院経営者）の、「アハリー通信2013年クリスマス号」掲載の言葉から、以下引用します。

「ガザの貧しい人たちに癒しを提供するという私たちの使命は、みなさまからのご支援によって、継続が可能なのです。このことは間違いありません」

当「アハリー・アラブ病院を支援する会」は1991年、当時の日本基督教団社会委員会が窓口となり、広く賛同者にも呼びかけて発足しました。発足以降年2回ほどの「ニュース・レター」を発行し、クリスマス時期には、教団の諸教会並びに賛同者に献金の依頼をお願いしてきました。

今回はアハリー病院全体の破壊という状況下で、同病院の再建・再興を祈りつつ継続的に支援の輪が広がっていくように願っています。

主イエスが誕生した時代、時の王ヘロデ王は2歳以下の嬰兒皆殺しを行使していますが、現在パレスチナの地では、全く同じことが起きています。

われわれの支援の手がこれからの平和と和解の道に連なることを願いつつ、皆様方のご協力を心よりお願いいたします。

（むらやま・もりただ／隠退牧師／共同代表）

<NGO 6 団体>

- *アル・ハック＝パレスチナ人に対する人権侵害の監視、人権擁護全般
- * UAWC = パレスチナ農民の生活と権利擁護
- * UPWC = パレスチナ女性の権利擁護
- * Bisan Center = パレスチナ市民社会の民主主義擁護・促進
- * DCI-P = パレスチナの子どもたちの生活と権利の擁護
- * Addameer = パレスチナ人政治犯の権利擁護、待遇改善

イスラエル軍によるガザ地区の医療施設（病院・診療所）に対する攻撃が常軌を逸したレベルになっている。集中的な空爆の始まった10月7日からの一ヶ月で110を超える医療施設が破壊され、130人以上の医療従事者が殺害された。その被害の全貌はまだ明らかではないし、イスラエルによる攻撃は継続しているので、この数字はまだまだ大きくなる公算が強い。

イスラエルは「ハマース掃討」「テロリスト排除」という名目で、「そこに戦闘員が潜んでいた」と言えば、学校・病院・民家・商店などどこでも爆撃し、それを正当化する。救急車の車列さえも爆撃されたが、それさえも「ハマースのメンバーが乗っていた」とイスラエルは主張した。なんの証拠もないのに、イスラエルの広報は壮大な嘘さえもこしらえてテレビで流させる。たとえばシャイフ・ハマッド病院の建物側への空爆について、イスラエル軍は航空写真で建物前の地面にある四角い入口を示し、「これが地下施設への出入り口で、病院の地下にハマースの拠点があった」とまことしやかなコンピューター・グラフィック映像でその地下施設とやらを「再現」して放送した。おそらくイスラエル国民やイスラエル支持者らはそれを鵜呑みにしてしまう。だが、その地面の穴は病院の地下貯水槽の口にすぎないことが判明したのだが、もちろんイスラエルがそれを認めて訂正することなどない。そもそも屋外の丸見えの地面に「秘密の地下施設への入り口」があるという想定そのものが荒唐無稽だということにさえ考えが及ばずに、プロパガンダが生産され消費されている。

ここで大きく二つのことを掘り下げたい。一つは、イスラエルはなぜ病院を攻撃するのか。もう一つは、ハマースとは何者か。それを考えることが、ガザ地区とは何か、そしてイスラエルによるパレスチナの占領政策の本質を知ることにつながる。

第一に、イスラエルが病院や学校を攻撃するのは、そこにハマースの戦闘員が潜んでいたからではない。それは対外的な弁明にすぎず、実際にはその施設を破壊することそのものが意図されている。

イスラエルはガザ地区を、2000年の第二次インティファダ（抵抗運動）以降、封鎖空間に置くようにしてきた。2002年からヨルダン川西岸地区でも悪名高い隔離壁の建設が開始されたが、ガザ地区はすでに第一次インティファダ後の1990年代から壁とフェンスで包囲されたうえでイスラエルへの出入りが管理されるようになっていたが、第二次インティファダでガザ地区の「切り離し」つまりイスラエルへの出稼ぎ労働の制限や物資の搬入制限が強められていった。

そもそもガザ地区であれ西岸地区であれ、イスラエルはパレスチナ社会が経済発展して自立することができないように、占領政策を行ってきた。遅れつつも発展している「低開発 under-development」ではなく、そもそも発展できないよう「反開発 de-development」という構造に占領地を置くことで、パレスチナ社会はイスラエルに依存せざるをえなくなる。イスラエルに出稼ぎに行き、その賃金でイスラエルから物を購入し消費する、という循環だ。しかし、1987年の第一次インティファダという組織的抵抗を示すパレスチナに対して、この占領方式ではもたないと判断したイスラエルは、まずは1993年のオスロ合意で「自治」という名目を与えて、自らの占領責任を放棄し、国際社会による援助でパレスチナを支えさせることにした。しかしこれも名ばかり

「生存不可能」にするために病院は意図的に破壊された



■ガザ市のシファ病院には少なくとも5,000人の患者と数千人の難民が収容されている (Abdelhakim Abu Riash/Al Jazeera)

りの自治で、事実上は東エルサレムも入植地の土地も国境管理も水資源も奪われたままの欺瞞的な「和平」にパレスチナ人の我慢の限界が来て、第二次インティファダが勃発。これによりイスラエルは本格的な「切り離し」を始めるのだが、狭隘で資源的価値の小さいガザ地区は全体として切り離し（2005年にガザ地区内の入植地と軍基地を撤去したこともその一段階）、入植地・農地・聖地・水源などの資源的価値の大きい西岸地区は細分化したうえで入植地を領土化しつつパレスチナ人の街を切り離すことに（隔離壁はその一手段）。つまりパレスチナ自治政府との政治交渉を抜きに占領政策の一方向的な転換を図ったのだ。

そのうえでガザ地区は、封鎖による兵糧攻めと見せしめの攻撃に晒されることとなった。極度の失業と貧困によって国際社会の人道支援なしにガザ地区での生活ができない状況に追い込み、かつ、抵抗運動に対しては徹底的に軍事攻撃を加えて戦闘員だけでなくガザ市民を広範に殺傷しまた家屋やインフラを破壊することで、ガザ地区を「生存不可能 unviable」にしていった。病院や学校などへの攻撃も、この政策意図でなされている。この究極的な目標は、一方で「見せしめ」として利用して西岸地区のPLO自治政府を従順化・無力化させつつ、他方でガザ地区そのものを長期的に抹消することつまり「民族浄化」であった。この意味でも、今回の絨毯爆撃や強制移住は全く新しい事態というわけではない。規模と速度はこれまでにない次元になったが、ガザ地区に対するこの政策の基本方針の転換は、第二次インティファダ後

になされていた。

（「反開発」および「生存不可能」という概念はサラ・ロイによる。）

第二に、10月7日のイスラエルへの攻撃を担った中心的組織であるハマースをどう考えるか。報道では「ガザ地区を実効支配するイスラーム原理主義組織ハマース」と言われるのが常である。これは、ヨルダン川西岸地区を統治しているPLOの自治政府のみを唯一正統とみなし、ガザ地区のハマース支配を無法な武装勢力とみなしているためである。

しかし私たちは、2006年のパレスチナ議会選挙において、西岸地区とガザ地区の両方でハマースが、当時与党でPLO主流派であるファタハに対して勝利したことを思い起こさなくてはならない。ハマースはその時点で、選挙的正統性を有する唯一のパレスチナ自治政府を発足させたはずであった。ところが、EUの選挙監視団の入った公正な選挙結果をイスラエルと欧米と日本は完全に無視して、ハマース政権をボイコットした。その理由は、ハマースがまさにオスロ体制を否定する政党だったからである。細かく見ればイスラーム色や人脈や利権などの要素も作用しただろうが、最大の争点はオスロ体制の欺瞞に気づいた民衆が、援助利権で腐敗したファタハに対する批判票をハマースに託したことに尽きる。

またここで重要な点は、言われるようにハマースが「原理主義」で「イスラエル国家の廃絶」を主張しているということでは全くない、ということだ。そもそも原理主義というレッテル自体が欧

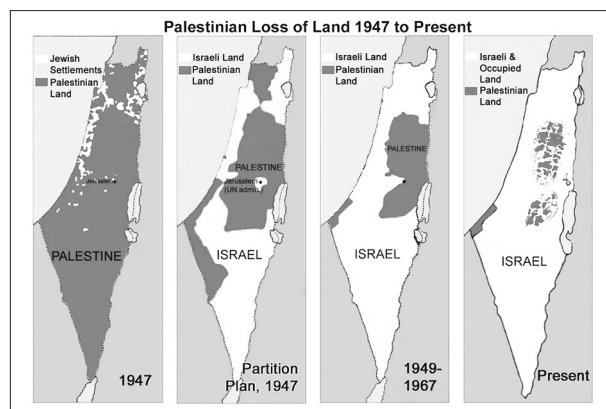


■先月のアハリー・アラブ病院での爆発で負傷した数百人のパレスチナ人は、アル・シファ病院に移された。現在、アル・シファはイスラエル軍の砲撃の標的となっている [Mohammed Al-Masri/Reuters]

米の反イスラーム的偏見であり、またパレスチナ人がイスラーム化したということもない。さらに与党となったハマースは、その政治綱領を「東エルサレムも含むヨルダン川西岸地区およびガザ地区からのイスラエル（軍と入植地）の完全な撤退」とその両地区における「完全な独立国家」へと変更し、もしその条件が満たされるのであれば「イスラエル国家を承認する」としていた。確かに現状ではイスラエルを承認はしていないが、イスラエルの廃絶の主張は取り下げた。むしろ、「二国家解決」というオスロ合意の「タテマエ」の原則的徹底を主張しているとさえ言える。

しかしそうだからこそ、イスラエルと欧米はそのハマース政権を容認できなかった。西岸・ガザ両地区での完全な独立国家ということであれば、東エルサレムの返還、入植活動の停止はもちろん、既存の入植地の撤去（西岸の入植者数は70万人にも達する）、国境管理権の移譲といったことが必須となる。実はオスロ合意ではこのすべてが「将来的な検討課題」として先送りされており、一切の独立国家としての内実を欠いたままPLOはイスラエルを承認させられていた。つまり空手形に騙されていたのだ。イスラエルは1993年の合意以降も一瞬たりとも西岸地区への入植活動を緩めることなく、着々と収奪と領土化の既成事実を積み重ね、またオスロ体制下での「自治」も、入植地や入植者用道路で細分化されたパレスチナのばらばらな市町村単位で行政権が、つまり占領の下請け行政が認められたのみであった。

ハマースが拒否したのはまさにそのオスロ体制であり、逆にだからこそイスラエルはそのハマースを脅威とみなした。イスラエルと米国とは選挙に敗北したファタハに武器・弾薬を提供してハマースとの内戦を煽り、とりわけ西岸地区ではイスラエルの治安警察がハマースの議員と活動家らを逮捕し、収監ないしガザ地区へ追放した（ガザ地区は流刑地でもあった）。その結果、西岸地区ではファタハがイスラエルと米国に支援された武力クーデタによって自治政府を名乗り、逆にガザ地区ではハマースがファタハを叩き出して、選挙で得た政権を維持した。その内戦が2007年に決



■パレスチナ人の土地喪失 1947年から現在まで (<https://ifamericansknew.org/> / IF AMERICANS KNEWS)

したときに、西岸地区とガザ地区の分断が生じ、西岸のファタハ政権とガザ地区のハマース政権という二つの内閣ができるという異常事態となった。

そしてこのときからガザ地区に対する封鎖と攻撃がエスカレートしていく。ハマースとファタハとの連立政権もその後何度か合意したが、その都度イスラエルが拒絶してガザ地区を大規模攻撃し連立を潰してきた。ハマースが政治交渉に入ることは予め排除され、ガザ地区住民はひたすら非人間化され、兵糧攻めと空爆にひたすら晒され続けた。したがって、ハマースとは何者かと問うよりも、私たち世界はハマースに対して、そしてガザ地区に対してどういう態度をとり続けてきたのか、これをこそ問わなくてはならない。

おわりに、10月7日に急に事態が展開したのではないし、ハマースから仕掛けたことでもない。これは長期的で計画的なガザ地区の破壊と抹消であり、病院攻撃もその一環である。生存不可能な環境が極限に達したとき、国際社会は皮肉にも善意からイスラエルの意図に沿ってこう言いださだろう。「人道的配慮をもってガザ地区から住民を避難させよう」。このときガザ地区は消滅し、次なる標的は西岸地区に全面的に移っていき、同様の手法が取られていくだろう。それがイスラエルにとって意味するのは「パレスチナ問題の最終解決」である。これを世界が阻止できるかどうかを試されている。

(はやお・たかのみ／社会思想史／東京経済大学教授)

パレスチナの地を訪ねて

外谷悦夫（市川三本松教会）

テル・アビブ空港に到着したのは、9月15日午前1時前であった。9月14日成田をたちウィーン経由でテル・アビブ空港まで何れも満員だった。イスラエルの新年（今年は9月15日～25日）にパレスチナに旅することになった。乾期で埃が木々につもっている。今回の旅は、山本光一牧師、お連れ合いの山本充枝さん、パレスチナの支援をされている白山晴雄さんと私の4人であった。宿はエルサレムのロシア人住居区。訪ねた所は次の通り。

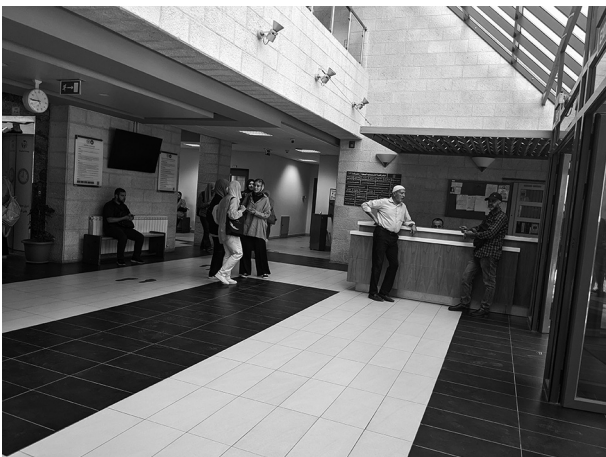
- ・エルサレム旧市街の聖墳墓教会等。「パレスチナに平和を」訴えるデモを見学支援。
- ・シュファット難民キャンプ。シュファットは2つあり、最初は違う所を教えられ、バスを乗り直して目的地に到着。1948年のイスラエル建国直前から家を破壊し迫ってくるイスラエル軍から逃れた人びと（75万人）がテント生活を始めた地の一つであった。8mの高さを持つ分離壁の中に入るために検問所を通り Shu'fat Health Centre in Jerusalem の医師等にボールペンや湿布薬等を手渡す。住居建物には弾丸跡あり。戻りゲッセマネの園等見学。
- ・ナブルス（シケム）。アン・ナジャハ大学を見学。案内をしてくれた助手の方は、ドイツに3ヶ月



■焼かれてしまったリーブの木

研修に行かれた女性の研修者であった。女子学生が多く、生き生きと学んでいた。石鹼工場を経営する方（ケンブリッジ大学で建築学を学ばれた）が商店を案内くださり甘い甘い御菓子をご馳走してくださった。ゲリジム山からエバル山を眺める。

- ・ヘブロン。ガリコ・美恵子さん案内。イブラヒムモスク（サラ、アブラハム、イサク、ヤコブの墓がある）の礼拝はユダヤ人のみ。軍は新年の警戒をしていた。幼稚園を経営するツレーハ女史を訪ねお話しを聞く。次に、支援活動をしているイッサ・アムロさんの事務所を訪ね山にのぼる。途中、樹齢100年以上オリーブの木々が焼かれた土地があった。イスラエル入植者の嫌がらせだという。アムロさんに支援金を渡し祈った。この山の頂上には小さなシナゴグがあり、日本の中学生くらいだろうか、10数人の男子がラビによって賛美をささげていた。ルツ



■アン・ナジャハ大学

(ダビデの曾祖母) とエッサイ (ダビデの祖父) の墓があり記念されていた。

- ・ビリーン村訪問 (白山さんのみ、活動家2人ハイサムさん、ラニさん訪問) ベツレヘムのデヘージャキャンプ訪問 (山本、山本、外谷)。イエスの別の墓からベツレヘムの生誕教会へ (ベツレヘムでラテン語に聖書を翻訳したエラスムスの像が同じ敷地の隣に立っていた)、バンクシーが分離壁に描いた天使の絵を見て、デヘージャ難民キャンプの山本さんの友人宅を訪問。再会を喜ぶ。白山さんはビリーン村から戻るときラマラの検問所で刺傷事件が起こり封鎖。急遽タクシーでカランディアの検問所に向かいバスでエルサレムに戻る。
- ・ヘブライ大学博物館見学。歴史遺物と第2神殿を中心としたエルサレムのジオラマと死海写本を見る。死海写本が収められている建物は日本の JICA が建てたという。
- ・ナブルスのバラータキャンプ。分離壁はなかったが、荒廃していた。ある家は直径 20cm 近くの穴が幾つも空けられコンクリートが室内に散



■壊された家の内部

乱していた。撮影していた白山さんのカメラを黒い服に身を包んだイスラエル兵が奪おうとした。抵抗したため去っていった。山本さんはここで17年前に出会った少年を探して、家まで案内されたが、住まいを変えていた。生存が確認でき、ナブルスの町で5分ほど会うことができた。定職にはつけないで、石鹼工場のアルバイト等で凌いでいるとのこと。この夜、テル・アビブ空港へ。24日早朝、スイス、チューリッヒ空港経由の飛行機で25日成田着。

訪ねたところ全てに20才前後の男女のイスラエル兵が武装し検問所等で監視。水も管理され息がつまる圧迫感と人権を無視するイスラエルが占領している中で、パレスチナの人々は大人も子ども心に傷を抱えながら遅くパレスチナに住み続けていた。

帰国から13日後の10月7日、ガザのハマスがイスラエルを攻撃し、戦争状態になった。

(とや・えつお/日本基督教団市川三本松教会牧師)



■焼かれてしまったリーブの木

QUIET ACTION NABLUS ガザからナブルスに避難している クワイエットアクションナブルス 人びとを支援しよう！

アハリー・アラブ病院を支援する会のメンバーである山本光一さんご夫妻は、パレスチナから日本に留学していたアマハド（仮名）の生活を長く支援していました。パレスチナに戻って医師をするそのアマハドから SOS が届きました。アハリー・アラブ病院を支援する会は、仲間が立ち上げたアクションを支援します。皆さんからいただいた献金の一部を、ガザからナブルスに避難している人びとの支援にも用いることにしました。連帯の輪を拡げましょう！

ガザ地区は、パレスチナ自治政府を構成するパレスチナ領域であり、長い間「天井の無い監獄」と呼ばれています。生活がままならないのです。例えば火力発電所は燃料が十分に供給されず、電気が付くのは一日 4 時間程度。下水処理施設はイスラエルによる設備資材のガザへの搬入阻止によって機能不全を起こし、ガザで供給される水の 95% が汚染されており、病気の 3 割は水が原因だとされています。

ガザ地区に住む 237 万人の方々の 3 分の 2 は、1948 年の勝手なイスラエル建国宣言と第一次中東戦争によって発生したパレスチナ難民およびその子孫です。

10 月 7 日早朝から始まった戦争状態は、悲惨を極めています。イスラエル軍による空襲と地上部隊による攻撃でガザ市民の死者は、一か月経って 1 万人を越えました。

パレスチナ領域ヨルダン川西岸地区の北方にナブルスという町があります。聖書においてはアブラハムがカナンに入ったときに最初に滞在した場所、サマリア人の居住地として知られる歴史ある町です。

11 月 3 日、この町のアン・ナジャハ国立大学病院の医師である、アマハド（仮名）から「助けて欲しい」とメールが入りました。

ガザからナブルスに避難されている方々が現在 400 人ほど居られる。しかし、住む場所が無く路上で生活をしている。すぐに助けなければならない。

まず、衣服、食料、住居、医薬品の支援をする必要がある。病院の仲間の医師たちや友達と相談して、すでに取り組みを始めているが、その為の資金が足りない。助けて欲しい。就職先を探すことは重要だ。（しかし、イスラエルの占領政策によってパレスチナ人の失業率は 50% に近く、職を得ることは極めて困難です）、職を得ることができればなんとかなる。私の父のパン屋に 3 人を雇ってもらったが、焼け石に水だ。このような要点でした。

現在ガザに住みイスラエル軍の熾烈な攻撃に晒されている方々、ガザからパレスチナ領域に避難されている方々のことを思うと、この取り組みは極めて局所的な取り組みです。

しかし、わたしたちは、アマハド医師が始めたガザからの避難者を助ける取り組みにできる限りの支援をしたいと思います。

皆様のご協力をお願いいたします。

クワイエット・アクション・ナブルス 事務局 山本光一（日本基督教団隠退牧師）

※パレスチナの人びとは検問所等で常にチェックされています。アマハドと仮名にしているのは、こうした活動がイスラエル側に知られることにより不当に逮捕、拘束される可能性があるからです。こうした活動をイスラエルは以前から警戒しており、インターネット上などで詳細にチェックしています。

■郵便振替：00150-7-601525

■ゆうちょ銀行 019（ゼロイチキュウ）支店 当座 0601525

口座名：アハリー・アラブ病院を支援する会

※どちらも口座名は同じです。領収書が必要な方は通信欄にご記入、もしくは ayyam_ahli@yahoo.co.jp までメールを！